大和路・信濃路

堀　辰雄

大和路・信濃路

定価は帯またはカバーに表示してあります。

新潮文庫 草 4F

昭和三十年十月三十日 発行
昭和四十五年二月二十日 二十一刷改版

著者 堀辰雄
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)(二六〇)一一一一
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

㊫ 印刷・東洋印刷株式会社 製本・新栄社製本所
© Taeko Hori 1955 Printed in Japan

新潮文庫

大和路・信濃路

堀　辰雄著

新潮社版

869

目次

狐の手套……九
一、（芥川龍之介の書翰に就いて）……一〇
二、「文芸林泉」読後……一四
三、クロオデルの「能」……二二
＊
雉子日記……二七
雉子日記……二八
続雉子日記……三五
雉子日記ノオト……三九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

*
フローラとフォーナ……四三
木の十字架……四九
*
伊勢物語など……六一
姨捨記……六九
*
大和路……八一
十月……八二
古墳……一一五
浄瑠璃寺の春……一二九
「死者の書」……一三七

信濃路……一四五
辛夷の花……一四六
櫨の上にて……一五三
＊
雪の上の足跡……一五九
解説　丸岡明

大和路・信濃路

狐(きつね)の手套(てぶくろ)

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

一（芥川龍之介の書翰に就いて）

僕はこの頃、芥川龍之介書翰集（全集第七巻）を読みかえした。そしてちょっと気のついたことがあるから、それを喋舌ってみたい。

芥川さんは brilliant な座談家だったそうである。そういうどこか才気煥発といったような風貌は大正七、八年頃の書翰の中にうかがわれないことはない。しかし、そういう芥川さんは僕のすこしも知らない芥川さんだ。

又、芥川さんは風流人だったそうである。なるほどひと頃の書翰を見ると、終日俳句に凝ったり、なんという雅号をつけようかと苦心したりしている。そういう「澄江堂主人」もまた僕はあまり知らないのである。

それでは、僕の知っている芥川さんはどういう人かといえば、そのような談論風発といった人でもなければ、又、風流な澄江堂主人でもない。その頃からもう神経衰弱であったせいか、むしろ話の下手くそな、無風流な人であった。しかし、そういうものを通じたおかげで、僕はかえって芥川さんの本当の brilliance に接触していたのである。

晩年の諸書翰は、そういう吃りがちな芥川さんをかなり明瞭に語っている。その中には、書く

のがいやでいやで仕様がないといった調子の手紙が少くない。そうでなければ、大抵は自分の病苦を友人に訴えた手紙だ。ことに斎藤茂吉氏宛の数通の書翰にはもう心身共に疲れきっていたらしい芥川さんの姿が髣髴される。そしていかにも斎藤氏一人を頼りにされていたらしいようである。それらの書翰を通じて、斎藤氏の芥川さんに対する温かな心使いをしみじみと感じるのは僕一人だけであろうか。

＊＊＊

漱石、鷗外の両氏を除けば、芥川さんのもっとも私淑していた先輩は、斎藤茂吉氏と志賀直哉氏の二人であるといってよい。就中、斎藤茂吉氏については、その歌をいかに愛しているかを芥川さん自ら「僻見」（全集第五巻）の中で書いている故、僕はここには書翰集の中から数行を引用してみよう。

昭和二年二月二日斎藤茂吉氏に与えた書翰の中に、「先夜来、一月や二月のおん歌をしみじみ拝見、変化の多きに敬服致し候。成程これでは唯今の歌つくりたちに idea の数が乏しいと仰せらるるはずと存候。（もちろんこれは小生をも憂ウツならしむるに足るものに候）……」と書いている。

僕はこの頃作家には二つの型があるように思っている。一方の作家は一つの作品から次の作品へと直線的に、或はスロオ・カアヴを描きながら、進んでゆく。もう一方の作家は、稲妻形に進

むのである。たとえば、歌人の場合もそうであって、島木赤彦氏などは前者のよい例である。そして斎藤茂吉氏などが後者ではないかと思う。前者は深くはいることにのみ専心する。どうしても一本調子になる。idea の数が乏しいのだ。それに反して後者は作歌の変化をその生命としている。idea を豊富にしようとする。一首ごとに別の idea を盛ろうとする。つまり仕事の上で慾張りなのだ。

＊＊＊

短篇作家としての芥川さんもまた、斎藤茂吉氏のような稲妻型の作家であった。この種の作家にあっては、仕事に活気のあるときはどうもその稲妻のジグザグがはげしい。

晩年の芥川さんの仕事を見るがよい。ほとんど矢つぎ早に書かれた「玄鶴山房」「蜃気楼」「河童」「三つの窓」「歯車」それから「西方の人」などを列挙すれば、いかにそれらの作品が変化に富んでいるかが解るだろう。そういう芥川さんや斎藤茂吉氏のような作家の諸作品を味うには、先ず、今いったような idea の数の多いことを楽しんでかかる方がいいと思う。勿論、それが唯一のものであってはならない。が、そんなことは云うだけ野暮であろう。

＊＊＊

僕はもっと斎藤茂吉氏に宛てた芥川さんの書翰について書いてみたいのだが、それは又次の機

会にしよう。そしてここにはこの書翰の一通（大正十五年十二月四日付）から少しく引用して置こう。

「……オピアム毎日服用致しおり更に便秘すれば下剤をも用いおり、なお又そのためじが起れば座薬を用いおります。中々楽ではありません。しかし毎日何か書いております。小穴君（隆一氏のことなり）この頃神経衰弱が伝染して仕事が出来ない。僕曰く僕は仕事をしている。小穴君曰くそんな死にもの狂いミタイなものと一しょになるものか。但し僕のはろくなものは出来そうもありません。少くとも陰うつなものしか書けぬことは事実であります。おん歌毎度ありがたく存じます。僕の仕事は残らずとも、その歌だけ残ればとも思うことあり。かかる事はお世辞にもいえぬ僕なりしを思えば自ら心弱れるのを憐まざる能わず。どうかこの参りさ加減を御笑い下さい。……」

附記　この一文を艸したのち、斎藤茂吉氏の芥川さんの死をともらう歌を読み、そのなかの「壁に来て草かげろふはすがり居り澄きとほりたる羽のかなしさ」という一首に私は云いようもなく感動した。

二　「文芸林泉」読後

「文芸林泉」は室生さんの最近の随筆集である。が、読後、何かしらん一篇の長篇小説を読んだような後味が残る。「京洛日記」や「馬込林泉記」や「いつを昔の記」などの小品風なものばかりではなく、「文芸雑記」などのようなものさえ、さながら小説を読んでいるような気持を起させるのだ。そこに室生さんの随筆の妙味がある。そして私は読後しばらくしてから、自分がそんな雑記のようなものにまで小説らしいものを感じさせられたのは、この本そのものの影響であることに気づいたのだ。室生さんは芭蕉や一茶の発句のようなものからすら、いつも小説らしいものを嗅ぎだされている。そしてそういうものを大層好まれている。逆に小説そのものにかえって小説らしくないものを求められる位にまで、そういうものを好まれている。私自身はこの頃どちらかというと、小説はやはり小説らしいものが好いのじゃないかという考えに傾き出しているが、そんな私までがこの本を読んでいるうちにいつか室生さん流になり、この随筆集から小説らしいものを感ぜさせられている。それほどこの本に親しめたことは、私にとっては何よりも気持がよいのだ。

＊＊＊

「京洛日記」は、この冬京都にラジオの放送に行かれた折、寺院や庭を見てまわられた日記である。それらの庭々の冬ざれの様子が巧みに配された人事と相俟って、たいへん興趣深く語られている。蝕ばんでぼろぼろになった板廊下だの、土塀の瓦や杉苔の色までがくっきりと目に浮んでくる。が、それと一緒に、明け方の京都の町を走っている放送局の自動車のなかで、講演原稿を大きな声で復習している室生さんの寒そうな姿が、甚だ印象的である。

そのなかの「龍安寺」の章を読みながら、この庭が芥川さんの最も愛されていた庭だったのを私は思い出した。室生さんも「ひょっとすると龍安寺などがこんど見て来た庭のうちで最も心に残って澄みきっているのではないかと思った」と言われて、その「京洛日記」を結ばれている。

しかしその庭を見に行かれた折の日記によると、「……六十坪に十五の石が沈みきっているだけである。しかし無理に私どもに何かを考えさせようとする圧迫感があって、それがこの庭の中にいる間じゅう邪魔になって仕方がなかった。宿に帰って燈下で考えるとこの石庭がよくこなれて頭にはいって来るようである。固い爺むさい鯱張った感じがうすれて、十五の石のあたまをそれぞれに撫でてやりたいくらいの静かさであった。相阿弥の晩年の作であるという志賀直哉氏の説は正しい。只、爺むさく説法や謎を聞かされるのは厭であるが、相阿弥のこの行方は初めはもっと石をつかっていてそれを漸次に抜いて行ったものか、もっと少なく石を置きそれに加えて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com